激闘！ パンケーキ！

木下　花菜

これは、梵納寺で暮らしつづける十三仏と帝釈天、天界に戻り後進の育成に励む梵天、そして、己の信じる正義を貫くため娑婆で善行を積む阿修羅が再び寺に集った、ある年の秋の物語である。

「それでは梵天、メモの通りのもの、よろしくお願いしますね」

「お任せください、観音菩薩様」

私、二大護法善神の梵天は久方ぶりに現世に帰還していた。奇跡的に都合がついたため、予定よりも一日早く寺に到着したのだが、あいにく帝釈天は外出中だった。昨晩帰省した阿修羅とともに、朝から街へ出掛けてしまったのだという。私の予定変更を知らせていなかったため仕方がないにしても、あぁ、あーちゃんは寺が近くてうらやま……、いいや、これ以上はいけない。これは私が選んだ道なのだから。

「……梵天？　どうかしたのですか、そんなに大きく首を振って」

「え？　あ、いえ……、何でもございません」

易きに流れそうな己を律するため、無意識にかぶりを振っていたようだ。観音菩薩様の背後から、まったく隠れられていない大きなお身体をひょこっと飛び出させ、勢至菩薩様が耳打ちする。

「だめだよ兄ちゃん。梵天は帝釈天に出迎えてもらえなくて傷心なんだ。わざわざ思い出させちゃかわいそうだよ」

「ハッ！　そうでしたか……。気が利かずすみません」

「ち、違いますのでご安心を!!　行ってまいります！」

お二方の気遣わしげな視線が辛い。私は笑顔を貼りつかせ、そそくさとその場をあとにした。

バスを降りて、一直線に向かったのは生城石毛だ。こうして女学生の姿で街を歩き、買い物をするのも懐かしい。しかし、現世に降り立ったばかりのあの頃とは違う。メモに書かれたものを迷うことなく選んでカートに収め、会計を済ませて店を出た。

三十リットルほどの買い物カゴを二つ分。これだけの量を一時

間かからずに調達できたというのは、我ながら成長したのではなかろうか。

梵納寺周辺のバス便は往路、復路ともに一日二本のみ。青果物などを傷めないよう、マイバッグを慎重に担ぎなおして元来た道を急いだ。通りをあと幾つか曲がり、凡納商店街を抜ければバス停に着くのだが。

「……？」

行きには感じなかった妙な気配にふと足を止める。人々の欲が膨張し、形を有するほどになったもの……、煩悩の気配だ。

腕時計を確認すると、目当てのバス便が到着するまで少し余裕がある。浄化には釈迦如来様の許可が必要だが、まずは様子を見て連絡を取るか判断しよう。こちらのほうだろうか……、気配の濃くなるほうへ、私は勘を頼りに路地に入っていった。

■

「ふたりともせっかく早く着いたのに、ココ(梵納寺)でゆっくりさせてあげられなくて、なんだか申し訳ないわね～」

「うん……、僕たちの準備が、終わってなかったから……」

テレビを眺めつつ、手元の運針を進めるのは阿閦如来と薬師如来だ。如来は修行の成果として、総じて幸福な味覚異常を有しているために、このように食事当番から外されることが時々あった。特に、来客時や何らかの祝い事の際にそのような傾向にあった。

「新しいパジャマ……、さんにんとも、喜んでくれるかな……？」

「そうねぇ。帝釈天は慣れてるけど、梵天と阿修羅はきっと、秋の山の朝晩の冷え込みは久しぶりでしょ？　気に入ってくれるといいんだけど……、あら？」

顔を上げたまま固まる相方の様子に、薬師も画面を凝視した。

「わ……、これは……。阿修羅と帝釈天、だね……」

時計の長針が十二を過ぎ、次の番組が始まった。数名の芸能人がのんびりと街歩きする人気の帯番組だ。本日の特集はなんと凡納商店街らしい。一行が通りがかったのは阿閦も時々訪れるパンケーキ店だ。

画面には見慣れた風景と、見慣れた人物と、その場に似つかわしくないもの――人々の肩に、頭に、醜くへばりつき、人々の健やかな暮らしを妨げるもの――が……ありありと映っている。

「煩悩、大きい……！」

「釈迦ーっ！　大変よ！　凡納商店街に、大きな煩悩が……！」

自室を駆け出してすぐ、その仏と落ち合えた。釈迦如来だ。

「梵天はブッダフォンを持っていたね。すぐに連絡を取ろう」

釈迦は携帯端末を取り出し、弟子に念を送った。

――梵天、聞こえるかい？――

――はい、釈迦如来様。帝釈天と阿修羅が目の前に居りますが、こちらに反応することなく何かを貪り食っています！　突入してよろしいでしょうか！――

応答する梵天の声が急(せ)いているのがわかる。

――君ももうそこに居るんだね？　それなら話が早い。君たち全員に戦闘を許可する。あと、迦楼羅天を向かわせるから、間に合うようなら合流してくれ。頼んだよ――

――ありがとうございます！　またご連絡いたします！――

通話を終えて再びテレビを見ると、芸能人らはその一帯を無事に通り過ぎていた。そしてそれは、帝釈天らの様子を窺えなくなったことを意味していた。

■

寺に帰省した俺は、朝早くから帝釈天に連れられて街に来ていた。かつて長旅を常としてきた俺たちにとって、昼までバス便を待つという発想はない。

「それで阿修羅、あそこの店が最近甘味処に変わったんだ。寄っていかないか？」

「いいぜ」

帝釈天は俺が帰る度に、こうして見慣れた風景の変わった

箇所を、特に菓子店や茶屋的な店を説明して回ってくれた。それはあの寺の中で俺の好みを唯一知っているというのに加えて、目上の仏たちに興味津々に囲まれることからの息抜きも兼ねているかもしれなかった。こいつは元来口下手で、言葉足らずなところも多々あるが、こういうさりげない気遣いと行動力を兼ね備えているところは信頼できた。

「あぁ、ここは……」

目当ての店に着くと、正面はガラス張り、内装はクリーム色で明るい雰囲気のパンケーキ店だ。確かに雰囲気はまったく異なるが、ガラスの向こうに広がる間取りと、両脇の店なども併せて眺め、この通りを前回案内されたときのことを思い出す。

「前に焼き鳥屋だった所か。梵ちゃんも一安心だろうな」

「そうかもな」

あのときは梵天もいて三尊でこの道を通ったのだ。煙に溶け込んだあの甘い香ばしさは、鳥類を永年使役している身としては居た堪れないものだったらしい。梵天は袖口で鼻や口を覆い、薄目のまま足早に通り過ぎていた。

「梵ちゃんは明日到着、って言ってたっけ」

「ああ。楽しみだ」

梵天は釈迦門下の兄弟子にあたる仏だ。永い間、何につけても帝釈天とやりあおうとする面倒な奴だったそうだが、俺やあの集落の件で大いに揉めたあと、和解してからは徐々に丸くなってきているらしい。明日の再会を楽しみだと話すこいつの表情からも、現在の関係は良好であることが見てとれる。

俺も初めは梵天を鬱陶しく感じて戸惑ったが、根が真面目なところは帝釈天と共通しているし、ある程度関わってみると、彼の口うるささは不器用な優しさの裏返しだとわかってきた。それに、梵天には帝釈天と異なり、良い意味での厳しさというか、規律を重んじて場の調和を図ったり、物事を俯瞰して合理的な判断を下せる強みもある。二大護法善神として、今後も是非帝釈天と上手くやっていってほしいものだ。

まだランチには早い時間帯のせいもあってか、店内は空いていた。店員に好きな席に座るよう促され、俺たちは出入口から

最も近いテーブル席に向かいあって腰かけた。ここからだと、行き交う人々の姿がよく見える。
「阿修羅は本当に衆生の者を眺めるのが好きだな」
「まあ、嫌なところもなくはないが、現世の人々の営みをこの目で見て歩く幸福に勝るものはない」
「ふふ、そうか」
「……、」
寺に住まうようになってから、帝釈天は時々こういう表情をするようになった。慈愛に満ちた眼差しを向けてくるのだ。
もし、あのとき俺たちが離別しなければ、そして如来や菩薩、梵天たちとの関係を築くことがなければ、こいつは今でもこんな表情を知らない仏だったかもしれない。
「……帝釈天、メニュー選ぼうぜ。お前のお勧めは？」
「あぁ。今まで頼んだことがあるものはどれも美味かったが、」
品書きの冊子を横向けにし、表紙から順にふたりでゆっくりと捲っていった。
「うん？　これは新しい試みか？」
冊子の途中に挟まっていたパウチに、帝釈天の目がとまる。
『平日限定、完食で無料キャンペーン』……、要はフードファイトか。女性は五皿、男性は八皿が条件、制限時間は三十分。予約不要だとさ」
一般に、メニューの外観的な美しさを観賞したり、まったりした時間を楽しむためのはずのパンケーキ店に似つかわしくない企画な気がするが、開店間もない店だと宣伝や集客のためにこういうことをする場合もあるのかもしれない。
「俺たちなら余裕だな」
帝釈天はやる気満々のようだが、俺は同意しかねる。暴飲暴食は禁欲から外れた行動であるし、緊急性のない事柄に大金をはたく可能性がある点も気が進まない。
「そうかもしれんが……、失敗したときのことも考えとけ。一皿だいたい一、五〇〇円として、ふたりとも失敗した場合、最大二四、〇〇〇円かかるんだぞ。お前、幾ら残ってるんだ？」
財布を確認した帝釈天は、苦い顔をした。

「ううむ……、二、〇〇〇円強だな」
実を言うと、俺には旅先で得た小金があった。釈迦如来に報告を求められていない金だ。しかし、それをこういうときに使うべきではないのは明らかだし、できれば帝釈天にも知られたくない。万が一のことで、世話になっている寺の仏たちに迷惑を掛けてはいけない。
「じゃあ一皿だけにしとけ。俺もそうする」
帝釈天を励ますため、できる限りの笑顔で二の腕をポンポンと叩いて伝える。
「今までで一番美味かったやつ、俺に選んでくれよ。で、お前はそれ以外で食いたいやつ選ぶんでどうだ」
「そうだな。俺、食ったことないのを注文したい」
帝釈天はうんうんと唸りながら品書きを熟読した末、ようやく一つに絞れたようだった。

■

「美味い！」
「美味ぁい！」
結局、帝釈天は初めて注文したという栗と薩摩芋の黒蜜掛けパンケーキ、俺は帝釈天お勧めのバナナチョコパンケーキバニラアイス乗せを堪能していた。
「さすが帝釈天、お前の味覚に間違いはないな！」
「俺もお前も、あの頃から味の好みが大きく変わっていないということだろう」
帝釈天も、久しく会わずにいた俺の舌を満足させられて安心しているようだった。
「この生地はなんでこんなにふわふわなんだ？」
この優しいクリーム色は、一枚につき優に三センチはあるだろう。ふわふわなのに瑞々しくて、決して生焼けではないのに、牛乳が滲み出てきそうで出てこない。なんとも不思議な弾力だ。
「卵の白身だけを巧く泡立てるとそうなるらしい。名前を思い出せないが、そういうふわふわを、メ……なんとかというそうだ」
「くぇ、メ？」

梵天から譲り受けた現代用語辞典に載っているだろうか。
あとで引いてみよう。いっぽう帝釈天の皿に目をやると、帝釈天のパンケーキは俺のものよりも落ち着いたベージュ色をしている。きっと味付けが異なるのだろう。
「そっちも正解だったか？」
「大正解だ。食えよ」
帝釈天は分厚いふわふわ三枚のうち一枚を食べ終えており、黒蜜のよく掛かっている真ん中だった一枚をフォークとナイフでむんずと挟み、満面の笑みで俺の皿に丸々乗せてくれた。衆生のマナーとしてそれが正しいかはわからないが、俺も同じようにして帝釈天に一枚やった。まだ形をそこそこ保っていたアイスの玉も半分に切って乗せてやった。
「う……つま、お前の！」
どうやら生地の色の正体は栗のペーストのようだ。栗のまろやかな香りに薩摩芋の強い甘みと黒蜜のコクが合わさって、これはもう、秋のスイーツの王様と呼んでも差し支えないだろう。
「だろ？　期間限定メニュー、これにして良かった」
懐かしいな……、この感じ。
こいつと旅をしていた頃は、毎日食事にありつけるとは限らなかった。僅かに出会う自生の植物やたまの頂き物など、片方が味見をして問題なければ何でも分け合っていた。正直、こいつと食えるならどんなものでも美味いのだ。俺たちの味覚が似ているのも、変な物に中(あた)ったり、毒を盛られたりしながら学んだ結果かもしれなかった。俺たちはそれくらい、長い、長い時をともに過ごした。そして別れ、こうして再び共に在るのだ。
「ご馳走様でした」
互いに顔を合わせて合掌し、伝票を会計に持っていこうと席を立ったとき、腕に新たな皿を乗せた女性店員が近づいてきた。
「お待たせいたしました。こちら柿と南瓜のパンケーキホイップ乗せと、チーズクリームのレモンパンケーキでございます」
念のため後ろを振り返ってみたものの、奥の座席は空席だ。お客様とは俺たちのことだろう。
「それ、頼んだの俺たちじゃないですね。もう伝票持ってますし。

別の席のかたのじゃないでしょうか」
しかし、女性店員はテーブルの番号と見比べたあと、間違いなく俺たちの席からの注文だという。
「じゃあ書き間違いとかですかね。俺たち本当に頼んでないです。持ち帰りたいくらい美味かったですが、あいにく手持ちに余裕がなくて、既に頂いた分しかお支払いできませんので……。すみません。行くぞ」
「ええ？　失礼しました」
俺たちはふたりで会釈してその場をあとにする。
困惑した女性店員は再び皿を腕に乗せ、他の客席に端から当たりはじめていた。気の毒ではあるが、本当に俺たちではない。気にしないことにして伝票を会計に提示すると、会計の男性は丁寧に応対してくれ……
「ありがとうござイ、マ、ズ……ボンジズノ、ゴボボ……」
「何ッ？！」
男性は突然表情を失い、ガクっと首を垂らす。同時に男性の両肩から黒紫色のへどろが沸き立つように出現し、あっという間に男性を覆いつくした。
……煩悩だ！！
「はあああああ!!!!」
帝釈天は瞬時に、擬態のまま男性に飛びかかり組みついた。俺は反対に後ずさり、煩悩と距離を取る。ちらりと背後を見ると、さきほどの女性店員が腰を抜かしており、壁際の座席の利用客数名も異様な空気におびえていた。
「お前たち、逃げろ！！」
六臂で素早く印を組み、視界に映る範囲での、煩悩に汚染されていない者たちを店外に吹き飛ばす。戦闘許可はなくとも、一般人の緊急危難に法力を使うことに許可は不要のはずだ。続いて結解を張り、能力のない者にはこの敷地に過去の映像が映し出され、無意識に入店を避けられるよう細工を施した。
「帝釈天！」
相方の元へ向かうと、組み伏せられた男性はへどろに覆われながらも、何かを訴えている。
「ダンゼイ、バヂザラ、ザンジッブン……」

「な、何だ……？　わかるか、帝釈天？」
「ううむ……、『男性、八皿、三十分』、じゃないか？」
先ほど品書きに挟まっていた、フードファイトの条件だ。
「クソッ……、たくさん食べてこの店を宣伝してほしい煩悩め……！」
「俺もできることなら食いたかったしな……」
神妙な顔でなんてこと言いやがる、この莫迦！
「無理なんだよ！　金ないって言ってるだろ！」
「ダベギレバ、オ゛ガネ、ガガラナイ、ゴボボボ……」
「いや……だからって、こんな真似しなくても、宣伝ならいくらでもしてやるぞ。俺は全国を歩き回ってるし」
「俺はもっと頻繁に食いに来ることもできる。仲間を連れてな。だから鎮まらないか！」
法力を用いて攻撃しないとなると、煩悩を鎮める方法は説得か、我が身に取り込んで浄化の二択しか思いつかない。できることなら後者は選びたくない。
「ギョウ、オ゛オ゛グイ、ジデボジ……イ」
「だから、なんでそんなに……」
「ゴボボ……」
「おい、大丈夫か！　しっかりしろ！」
帝釈天が押さえこんでいた男性が完全に意識を失った。まあ、暴れられたり、自傷を試みられたりするよりは安全だが。
「どうすんだ、これ……」
俺たちは煩悩に顔や身体をぎゅうぎゅうと押されながら、何もできずにいた。地蔵菩薩から借りていたスマホの存在を思い出した帝釈天が梵納寺に連絡を試みたが、結解を挟むと圏外になってしまう都合上、通信できなかった。しかし、そこそこ大きい煩悩を隔離できている今、結解を解くことが良案とは思えない。
戦闘許可がない。増援も呼べない。仏たち(仲間)に気付いてもらえる見込みもない。こんなとき、どうすれば……。何も浮かばず黙り込んでいると、帝釈天が口を開いた。
「阿修羅、俺たちで受け入れよう。それしかない」
「だが……、体への負担が大きいし、しばらく動けず防御もでき

なくなるだろ。迂闊な選択は……」
「いや、そうではない。煩悩を取り込むのではなく、煩悩の要望を満たしてやるのだ」
煩悩の要望？
「パンケーキを食うんだ！　理由はなんだかわからないが、八皿といわず、煩悩が満足するまで俺たちの腹に収めてやればいい！　万が一支払いきれなかったときは、結解を解いて観音菩薩様に連絡し、頭を下げて借金をしようではないか！」
……悪い冗談のように聞こえるが、こいつがふざけたことを言わない性格だということを、俺はよく知っている。代替案も思いつかないし、乗るしかないか。しかし……。
「わかった、試してみよう。だが、こんな状態でパンケーキは提供され……、うわあっ！?」
愚問だったようだ。俺たちがフードファイトを決意した途端、それを察したのか今まで俺たちを押したり締め付けてきていた煩悩は力を緩め、ドロドロと音を立てながら膨張すると俺たちをそっと包み込み、先ほど座っていたテーブル席に強制的に座り直させられた。
「阿修羅、来たぞ……」
「ああ……」
会計の奥、厨房から煩悩たちが雲のように宙を浮き、新しいカトラリー一式と水、パンケーキ、砂時計を乗せてこちらに向かってきた。
「ガギドガボヂャノバンゲーギ、ボイッブノゼデゴザイマズ……」
「ヂーズグリームノ、レモンバンゲーギデ、ゴザイマズ……」
それは、人ならざる声で品名を告げてくる。せっかく素晴らしい料理なのだからもっと美味そうに聞こえるよう言ってほしいが、煩悩はそのような要望に応える能力を有さない。砂時計がぎこちなくひっくり返された瞬間、煩悩との勝負が始まった。

■

「美味い！」
「美味ぁい！」

三皿目、四皿目、五皿目。

パンケーキはシンプルなものもあれば、先ほどの栗ペーストのように特別な風味のものもあった。果物、ソース、クリームなどのトッピングを変えるだけでこれほどまでに楽しめる菓子だとは奥が深い。できることなら毎日一皿ずつ、味の感想などを言い合いながらもっとじっくりと堪能したいのだが、俺たちは馳走を味わうのに惜しくない最大限の速度で舌鼓を打っていた。今のところ、ふたりともほぼ同じペースだ。

「帝釈天、まだ入るか？」

「ああ、余裕だ。どれも美味い」

「だな。時間はあと……、半分以上残ってる」

砂時計を横目で見るに、砂の量はまだ上半分のほうが多い。しかし後半戦は満腹感との戦いになるだろう。油断せずテキパキと咀嚼嚥下を進めた。

六皿目。

淡い紫色のクリームをふんだんに塗り囲まれたパンケーキだ。香りからして小豆のクリームだろう。半分にするため躊躇わずナイフを入れると、ぐにゅりという感触とともに、クリームに濃い赤紫色が滲んだ。こ、これは……。

「阿修羅！　粒あんだ！　割らずに食べたほうがいい！」

帝釈天も同時に気付いたようだ。今川焼のように、生地の中にたっぷりと粒あんが包まれていた。

「そうだな……、店員さん！　お箸二膳頂けますか？！」

幸い、粒あんはこしあんほど重たくならないが、粒が溢れてくると食べきるのに時間がかかってしまう。これは割らずに箸で挟み、中身をこぼさずに食べきってしまうのが得策だろう。煩悩が寄越した箸を急いで割り、啜るようにしてぶ厚いパンケーキ三枚を平らげた。

七皿目。

「これは、最初の……」

俺が最初に注文した、帝釈天が一番好きだというバナナチョコパンケーキバニラアイス乗せだった。しかし、あのときよりもトッピングの量が明らかに多い。バナナが丸々二本は使われているし、アイスも先ほどの二倍、チョコレートソースもティーカップ一杯

分くらいの量が掛かっているように見える。味に間違いがないのはわかっているが、物を飲み込みすぎて喉の感覚がだんだん莫迦になってきているのと、そろそろ胃袋の空き具合が心配だった。

「……いけるか？」

「……いける。美味いからな」

さすがの帝釈天も、小豆のパンケーキ以降表情が険しくなってきている。ここで休むと食えなくなると直感し、自分は普賢菩薩の連れている子ゾウになったのだと言い聞かせながら箸を進めた。あと、箸だと食いやすいな。

八皿目。

これが最後の皿だ。残り時間は……、ざっくり五分くらいはありそうだ。いつも三枚セットで来るから、最後くらいは一枚一分かけても間に合うように思う。大丈夫、大丈夫だ……。肩で息をしながらそう言い聞かせて、最後の皿を待ったのだが。

「……なッ、」

「正気かオイ……？！」

俺たちの間に置かれた最後の皿には、いわゆる普通のホットケーキが乗せられていた。

今までのスフレパンケーキとは異なり特別厚くはないが、軽く二十段以上積み重なっており、互いの視線がギリギリ合わさるくらいまでの高さがあった。直径も十五センチ以上あるように見える。七皿目まではそれぞれの目の前に同じメニューが運ばれてきたが、今回は一皿だけなので、ふたりの間での配分は自由ということだろう。

「この量、今からかよ……。正直……お前、食える？」

「くっ……、しかし、煩悩を解放してやるには、食べきらねば……」

帝釈天も、もはや持ち前の正義感のみで突き動かされている状態だった。

「そうだよな……」

煩悩は些細なことの積み重ねで、異常な大きさに膨張してしまうことがよくある。俺はこの戦いの条件を満たしたところで煩悩が縮んでくれると信じきってはいなかったが、それをまっ

すぐに信じる帝釈天の力には、なってやりたかった。箸を置き、息を目いっぱい吸い込みながら両腕を広げ、拳に力を込める。
「……ぬぅん！」
「三面六臂が浮かび上がって……、そうか、阿修羅！」
「胃袋は一つだが、これで三倍のスピードで口に運ぶことはできる！　行くぞ帝釈天！！」
「おぅ！！」
煩悩と戦うわけではなく、人間に姿を見られるわけでもない。俺は真の姿を解放し、最終決戦に挑んだ。

■

……おかしい……、おかしい。
先ほどからかなり加速して食べ進めているはずなのに、パンケーキが減っている気がしないのだ。段数を数えてみても、二の、四の六の八の……、おかしい。減っていない。
「なぁ、阿修羅……」
「言うな、帝釈天……」
「いや、その……砂時計、止まってないか？」
「……え？」
言うなといっても聞かないのがこいつの短所であり、長所だ。
確かに砂時計を見ると、くびれの部分からは砂が落ち続けているが、上の空間から砂が減っている様子や、下の空間に砂が新たに溜まっていく様子はみられない。
「何だ、これ……？」
いつから止まっていた？　パンケーキが減らないことと関係があるのか？　自分の腕時計を確認すると、現在……十四時を過ぎている！
「クソッ！　これは……」
「結界の中に細工を施されたようだな……うわ、」
帝釈天が皿の辺りを見ながら顔をしかめる。
「どうした？」
「増えている……」
「は？」

「今、底から、じわっと枚数が増えたのだ」
「はぁ？！」
食べている間に底からゆっくり上がってきているから気付けなかったのか。さすがにこうなってしまっては、勝てる気がしない。帝釈天も同じことを思ったのか、苦しげに提案してくる。
「阿修羅、結界を解除して応援を呼ばないか。俺が言い出したのにすまない。だが、もはや俺たちふたりではどうにもならない。寺の皆に謝って、助けていただこう」
「……ッ、」
俺のほうこそ力及ばず、お前の考えた作戦に乗り切れずすまない。寺の仏たちにも迷惑を掛けたくなかった。だが、今はもう、そうするしか……。幸い、俺たちが喫食している間に煩悩が大きくなったり、暴れたりする様子はなかった。今なら結界を解除する危険は少なそうだ。泣く泣く合掌し、印を結び念を込めかけたそのときだった。
――「その必要はない！！」――
脳内に直接語りかけてくる、その声は……！
■
俺たちの席の傍らに、天から差し込む極彩色の光の帯とともに姿を現したのは、俺たちの兄弟子であり、友である仏だった。擬態ではなく、優雅な羽衣を纏ったいつもの戦闘装束だ。
「梵天！？」
「梵ちゃん？！」
何故ここに？　現世への到着は明日だったはずでは？
「詳しい話はあとだ。釈迦如来様から戦闘許可を頂戴した。急ぎで迦楼羅天も寄越してくれている。食うのは終いだ。お前たちも戦え！」
「感謝する！」
「神かよ……、恩に着るぜ！」
「ま、護法善神だからな。お前たちも含め、誤りではない。行く

ぞ！」

大したことではないかのように、俺たちに背を向けて言う。

梵天の指揮により、梵天が店内の煩悩をまとめて引きつけ、帝釈天が金剛杵で斬っていった。

「すまないが、時間が計測できなくなった以上、この勝負はつかないものとみた！　どの皿も美味かった。また食いに来るから許してくれ！　はあああっ！！」

いっぽう俺は、煩悩と分離できた人間を結界の外へ速やかに移送する作業を任された。自ら出入りする場合を除き、この作業はその結界を張った者が行うのが最も安全だからだ。店員らの額に手をかざし、そっと声をかける。

「しばらくは客の入りが少なくても、がっかりするな。来月はクリスマスがあるし、お店に入りきれないほどの行列をお前らに見せてやるからな」

肉体が霧散する間際、店員は微笑んだように見えた。

「ヌオオオオオッ！！　ま、間に合った！」

迦楼羅天は結界の解除にギリギリ間に合って、ジェット機のような勢いでこの空間に飛び込んできた。フロアとの摩擦で羽毛の一部が焦げて擦り切れたようだが、もともと常に燃えている翼だ、羽を膨らませて数秒だけめらめらと勢いを増したあと、元通りに生え換わったようだった。

「迦楼羅天、ご苦労。あっちだ」

法力で縛りつけておいた握りこぶし大ほどの煩悩の山を梵天が払子で指し示すと、すぐさま飛びついて、モチモチと音を立てながら美味そうに平らげた。

□

軽やかなギターの背景音楽の中に、甘くて温かな乳と爽やかな果実の香り、芳しい豆の香り。そして食事を楽しむ者たちの食器の音や談笑する声が心地よく溶け込んでいる。

「なるほど、これがパンケーキ店……」

阿修羅が結界を解くと、時が動き出した。人間も私たちも、何事もなかったかのようにここに居た。阿修羅と帝釈天は支払

い損ねた伝票を持ち、あらためて会計へ向かった。私はすかさず、釈迦如来様に報告を入れる。

――「梵天です。危険な状態の煩悩を殲滅しました。迦楼羅天と阿修羅は無傷、帝釈天と私は軽傷です。迦楼羅天は先に帰し、今からさんにんで原状回復の確認を行います」――

――「了解。最後までしっかりよろしく」――

「ご馳走様でした」

「美味かったです、どれもこれも」

先ほどと同じ会計の男性店員はふたりに笑顔で礼を言いつつも、不思議そうな顔をしていた。「どれもこれも」と言うわりに、伝票には品目が二つしか記載されていないからだろう。

通話を終えた私も首を出し、店員に話しかけた。

「あの、このふたりがそちら様にご迷惑をお掛けしませんでしたでしょうか？」

ふたりから、戦闘に法力が使えない間、風土(ふうど)ファイトとかいったか道場破りのようなことをして煩悩と戦ったと聞いている。釈迦如来様から戦闘許可を頂戴した際の承諾には、場の原状復帰も含まれるものだ。店への被害を小声でそれとなくお尋ねしたが、それに対してもまったく心当たりがないというふうに、店員は首を傾げた。

「いいえ？　確か窓際のお席で、『美味い』『美味ぁい』と大きな声で、本当に幸せそうにお召し上がりになっていらっしゃいましたよね。お客様のああいったお姿は、私どもにとって何よりの喜びです。是非またお越しくださいませ」

「そ、そうですか……」

安堵と気恥ずかしさが相まって、思わず視線を外してしまう。すると店の宣伝だろうか、A5版のチラシと、名刺サイズの店舗情報が目に飛び込んできた。最近流行りの球アール神門(きゅうあああるこうど)というものも載っている。四角いのになぜ球と呼ぶのかは知らないし、神門の名は付いているものの、寺に持ち帰って何か問題が生じるわけでもあるまい。

「すみません、こちら、多めに頂いてもよろしいでしょうか？　差

し支えなければ、私たちの勤めるお寺にも置かせていただければと思いまして……」
「あ、莫迦、梵ちゃ、」
阿修羅が焦った顔で私の肩に手を乗せ、目くばせしてくるが、何だ？
「いや、すみません。こいつ妹なんですが、うちが寺なもので……」
なるほど、今の私は女学生の風貌だ。これで「勤めている」というのは傍から見て違和感があったのだろう。あーちゃん、フォローをすまないな。しかし、店員は何かに納得したように頷いた。
「ありがとうございます。ご負担にならない枚数をお持ち帰りくださいね。お寺さんのお嬢さんでしたか。どうりでしっかりされているわけです」
返答に困っていると、帝釈天が助け舟を出してくれた。
「そういえばお前だけ食ってないな、持ち帰り頼むか？」
「あ、ええと……」
今一度確認のため、ブッダフォンで話しかけた。
――「帝釈天、ここ、本当に美味いんだろうな？」――
――「間違いない。でなければ、こんな提案はしない」――
――「そうか。では……」――
「今ではなく、明後日の昼過ぎ頃にお願いしたいのですが。五十個ほど……は、難しいでしょうか？」
天界への土産にしたい。私も向こう（天界）で皆と頂こう。
「可能ですよ。お持ち帰りはお車ですか？　それだけの個数でしたらお届けも承りますが」
「本当ですか？！　それでは、梵納寺までお願いいたします。お支払いは、この場で」
私は可愛らしい小鳥の刺繍があしらわれた財布から、住所が書かれた周辺地図のコピーと、クレジットカードを取り出した。
「梵ちゃん、そのカードは先日の？」
「ああ、ようやく受け取れたのだ」
前回降臨した際、緊急時の必要性を見据えて梵天名義の銀行口座を開設し、カードも作ったのだ。月天子の助言も踏まえ、

生年月日は今年で十九になるよう設定してある。現金は初めに阿修羅から拝借した小銭だけ入れておき、天界に戻ってから宝生如来様にお願いして大量の宝珠を日本円に換金していただいた。これは寺の金ではない。神として天界で築き上げてきた私個人の財産だ。

味やトッピングは帝釈天に見繕ってもらい、配送手続きを済ませた私たちは釈迦如来様にご報告を入れた。

――「梵天です。原状回復の確認が取れました。帝釈天、阿修羅とともに、今から寺に帰ります」――

――「ご苦労だったね。さんにんとも疲れたでしょう？　夕方のバスの時 刻にはもう間 に合 わないだろうし、タクシー使っていいからね」――

――「承知しました」――

「拾うぞ、タクシー」

正面のふたりも体育会系の仏にしては珍しく、静かに顔を見合わせてガッツポーズをしていた。いくら好物とはいえ、三時間以上も不休で甘味を食べ続けていたのであれば当然か。

「フッ、」

私はあらためて、労いの意を込めた視線をふたりに送った。

車内では、奥から順に、阿修羅、私、帝釈天の順に乗った。

「梵ちゃん、今日は助かったぜ」

「なに、困ったときはお互い様だ」

口座の開設にあたり、寺と無関係な金を貸してくれたのはお前だし、今だって、私の代わりにお前たちがマイバッグを膝に抱えてくれているではないか。

「いや、これくらい、何の礼でなくても持つよ……」

タクシーはバスと違って頻繁に停車しないし、あらかじめ目的地を告げてあるので乗り過ごす心配もない。一仕事を終えて気が緩んだのか、帝釈天はいびきをかきながら頭をグラグラさせていた。いびきは多少うるさいが、こいつの寝顔は子どものように純真で、眺めていると不思議と心が洗われる。

帝釈天の寝顔に感化されてか、阿修羅が意外なことを言う。
「今日は人間に嘘をついてしまったな。帰ったら地蔵菩薩に舌を抜かれるかな」
私と兄妹だと弁明した、さっきのアレか？　確かに阿修羅は擬態の際、仏のオーラだけを消し去ったそのままの姿を好んでいる。それほどまでに気にする性質(たち)だったとは。
「まさか。嘘も方便というだろう。関係を円滑に進めるための嘘は罪に当たらない。地蔵菩薩様は背景もきちんと見てくださる御方だから、案ずるな」
「優しい先輩が多くて助かるぜ」
「私だけに言ってどうする。寺に着いたら、是非とも皆様の前でお聞かせしてさしあげろ」
「それは遠慮させてくれ……」
山道に入り、車体の揺れが続くようになる。道を曲がった拍子に帝釈天が思い切り寄りかかってきた。
「おい、帝釈天、」
「いいのだ、あーちゃん」
「重いだろ」
私は静かに首を振った。マイバッグは二つともふたりの膝の上で私はほぼ手ぶらだったし、久しく感じていなかった相方の重みと体温、そして身に纏う夜の森林のような落ち着いた芳香が正直心地よかったのだ。私も自然と瞼が落ちていった。

□

「ふたりとも、着いたぜ」
「んん……、ハッ？！」
優しく背中に手のひらを添えられて、意識が浮上する。目を開けると、私と帝釈天は八の字になって、互いに寄りかかって眠っていたようだ。しかも、鼠色のカーディガンを着ている帝釈天の右袖を抱え込み、両手でぎゅっと握りしめて。うわ……、す、すまない、完全に無意識だった。
「ううん……、梵天？」
帝釈天も目を覚ましたようだ。私の顔と自身の右腕とを

交互に眺めたあと、ここ数時間の出来事を思い出したらしい。
突然表情を明るくすると、大きく息を吸い込み、力強い抱擁を私にくれた。
「おかえり、梵天……！」
「あぁ……、ただいま」
私も厚くて温かい背中を抱き返し……、
――「悪いが、続きは降りてからやってもらっていいか？」――
「「すみません！　ありがとうございました！！」」
ひとまず、慌てて降車したのだった。

（おわり）